



感動のフィナーレ。会場の惜しみない拍手は鳴り止まない(写真提供：琴丘町)

感動を共有・「住民参加型」のまちづくり(琴丘町)

スポーツや文化などを通じ、町民主人公のまちづくりを進める琴丘町。新たな民俗芸能を創出しようとして平成7年に始まった野外劇「縄文ページェント 琴の海」は、他の様々な施策と合わせて、各方面から高い評価を得ています。

土笛がくれた

古代縄文ロマン

昭和57年に町内の高石野遺跡から約3千年前の土笛(つちぶえ)をはじめ、学術的にも貴重な多くの縄文の遺物が出土しました。

町では、長い町の歴史に親しみ、また、縄文から続く町の文化のアピールを図るため、縄文カーニバル等の縄文にまつわるイベントの開催や、土笛の複製の販売、歴史民俗資料館「縄文の館」建設など、土笛の里整備事業を展開してきました。

そして縄文へのこだわりはさらに深まり、新たな民俗芸能の構想が持ち上がります。平成5年、かねてから親交のあった、本巣羽後町出身のオペラ作曲家、仙道作三氏を町の「招へい文化人」第1号として招き、作曲・構成・演

出・指揮並びに総監督のすべてを託します。つまり町のお抱え作曲家」です。

実は仙道氏と琴丘町との出会いは、ヌーベル文化賞を受賞し絶賛を博した同氏の環境オペラ「手賀沼賛歌」に、同町の復元した土笛を舞台で使ったことに端を発しています。縄文の土笛が取り持った



宵間に集まったたくさんの観客。



子供たちからお年寄りまであらゆる年齢の出演者が登場

縁でしょうか。こうして町民総参加の野外劇「縄文ペーページエント」がスタートします。江戸時代後期の作家、菅江真澄の「遊覧記」には、「この湖はその昔『琴の湖』と呼ばれていた」という八郎湖に関する記述があります。縄文ペーページエントのタイトルは「琴の湖」に決まりました。

初めてだらけに奮闘？ 野外劇という「芸術」

海のものとも山のものともつかないこの壮大なイベントに、担当する役場職員ですら

大きな戸惑いを感じたと言います。こんな秋田の片田舎で、全くの素人はかりが集まって野外劇などという芸術作品を作り上げることができるのか……。かくして関係者の不安をよそに出演者・スタッフ合わせて1,000人以上の、過去に例を見ない前代未聞の大イベントの準備は進められていったのです。

完成まで2年半の間、この縄文ペーページエントを成功させようと、出演する町民たちは週2〜3回（上演が近づくと毎日）、仕事や学校の終わった夜に集まり手探りで稽古を重ねました。縄文の文様をあしらった衣装・土器楽器・小道具等の製作、そして間口30m奥行き20mの巨大ステージやオーケストラ・ピットの製作まですべて手作り、担当の役場職員もまた無休で準備に当たりました。そして平成7年8月26日午後6時30分、日本最大の町民総参加による縄文ペーページエント「琴の湖」初演の幕が上がります。

地域文化の再確認と 縄文時代への想い



「縄文人」としてあいさつする
工藤町長。（写真提供：琴丘町）

初演から今回で第6回目を迎えた縄文ペーページエント。古くから伝承されてきた郷土芸能による「民俗編」と、新たに創作された縄文ロマン漂う楽曲、舞踏の「縄文編」の2部で構成されています。

「民俗編」は民話劇群読、労働歌など、郷土の歴史を伝える構成。特に「山谷田植唄」は30年前に途絶えたものを復刻した、いわばリバイバル。貴重な芸能を残しています。また、今回は混声合唱「わがみずつみ」が初演として披露されました。

「縄文編」は縄文ロマンをテーマにした舞踏が中心の構成で、縄文太鼓の激しいビートや混声合唱の美しい歌声などに合わせ、出演者が躍動的に踊ります。祈祷により神と共に生きよつとした縄文人たちの生き様を想像させます。

各編とも幕間には方言による寸劇が挿入され、各楽番を繋ぎます。緊張の解けた観客が大笑いする瞬間です。

そして、フィナーレ。2時間を超える大作が幕を閉じ、達成感が感動へとかわります。観客の拍手も鳴り止もつとはしません。

町民みんなで挑戦する 参加型のまちづくり

6回に渡り上演されてきたこのイベント、住民の熱意は少しも衰えていません。構成や演出も毎年に工夫が凝らしてあります。毎年参加している人たちは年々熟味を増し、参加していない人たちは「今度は出てみたい」と答えます。

町では8種目の14地区対抗総合スポーツ大会や、20カ



「縄文編」の1シーン。舞台の端から端まで躍動し、集まっては散る。

国の自治体とスポーツ参加率を競う国際チャレンジデー、17年間も続くおはようジョギング体操など、体育によるまちづくりも盛んです。

このように町民主人公のまちづくりを推進する琴丘町は平成10年度の潤いと活力のあるまちづくり自治大臣表彰（住民参加のまちづくり部門）を受けています。小さい子供からお年寄りまで、強い結束力を持った町民の住む、小さな町の大きな勳章です。